子ども未来学研究　2015年　第10号　pp.35-44

イメージの伝承と国語教育

――子どもの「夕日」作文を事例として――

秦　　恭　子

言葉の伝承は、一つ一つの言葉の内に保ち伝えられているイメージと、子どもの内に発するイメージとが縒り合わされることによって成る。その際、子どもの内面は通時的かつ共時的な他者とつながり、それによって遥かな伸びを持つ連帯感と自己同一感が与えられる。本研究では、国語教育の本質であるその実相を明らかにするために、「夕日」を題とした子どもの作文におけるイメージの類型性と、日本風土に伝承されている「夕日」をめぐるイメージとの比較を行った。その結果、両者の間にはイメージの伝承が認められ、かつそのイメージは人間の内面世界を鎮静化あるいは活性化する作用を持つことが観察された。そのような作用を持つイメージの探究を基層研究として行い、それに基づいた効果的な教材開発や授業づくりを行っていくことの必要性が見出された。

1　研究の目的―イメージの伝承としての国語教育

「国語は、長い歴史の中で形成されてきた我が国の文化の基盤を成すものであり、また、文化そのものでもある。国語の中の一つ一つの言葉には、それを用いてきた我々の先人たちの悲しみ、痛み、喜びなどの情感や感動が集積されている。」これは、平成16年2月3日付の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」の冒頭に示された国語観の一節である。こうした国語観に立ち返るとき、国語の継承が、ただ辞典を繙きさえすれば叶うという類いのものでないことは自明となる。

一つ一つの国語の内には、先人たちの情感や感動、それらを伴ったイメージ[1]が、抽象的な意味に集約されないままに保ち伝えられている。それゆえ国語の継承は、一つ一つの国語に内包されるそれらすべてを承け継ぐ営みとなる。無論、子どもたちの心身は虚ろなものではないため、その営みは常に子どもたちの内に発する情感や感動、それらを伴ったイメージと先人たちのそれとが出会い、縒り合わされることによってのみ成る。日々様々に体験する情感や感動、それらにぴたりと符合する国語に出会うとき、その情感や感動は自身の内でより鮮やかなものとなり、他者に伝う可能性を開かれ、同時に先人たちとのつながりの中に解放される。こうして子どもたちは、国語の継承と生成の担い手となっていくのである。

国語教育の本質であるこうした営みあるいはその事象を、上原輝男（1927-1996）[2]は「心意伝承」の問題として捉えていた。心意伝承とは、柳田國男と折口信夫が生み出した民俗学の用語であり[3]、人間の心の基層に先祖伝来のイメージの働きを認めるものである。個人の内なるイメージは個人の経験や恣意によるものであるという一般的な考え方とは異なり、この用語は、心の

基層にはあらかじめ先祖伝来のイメージが息づいており、情感や感動を伴って生じる個人のイメージ（その表出としての言動、またその集合としての民俗）は、常にそれを源泉とし、その内容や形式のなぞらえとして生成されるという考え方を提出している。こうした民俗学的な見地から、上原は国語の継承を心意伝承の最たる例として捉えていた。つまり国語の源泉は、私たちの心の基層に予め伝承されているのであり、国語の継承は、そうした内なる伝承的イメージ（そのなぞらえとして生成される個人的イメージ）が、同様のイメージを保ち伝えている国語に出会うところに成立すると考えたのである。そしてその際、孤独の内にとじ込められた私たちの心は、通時的かつ共時的な他者とのつながりの中に解放されていく。国語の継承と同時に、長大な伸びを持つ連帯感と自己同一感が叶うのである。こうした考えから上原は、子どもたちの内なる伝承的イメージの追究を、国語教育の何よりの基盤に据えていた（秦 2015:59-60）。

難波博孝（2011）は、伝承的イメージに満ちた民俗の多くが衰退した今日においてこそ、上原の国語教育観は重要性を増すと言う。難波は、今日の子どもたちがゲームの世界に嵌り込むのは、日本社会の中で途絶してしまった伝承的イメージとのつながりを無意識の内に求めているためではないかと述べ、「神社の飾りかゲームのキャラクターかは、外面的な違いにすぎない。（中略：引用者）神社の飾りもゲームのキャラクターも、近代国家教育が、絶対に教育の対象にしないものなのであった。」と指摘しながら、「近代を生き抜くための、理性（意識／論理／思考）優位の言語を教えつつ、『イメージ』へとつながる産道を、思い出させる『しかけ』が、近代学校教育では意図的に必要である。」と主張し、上原の研究をその先駆として位置づけている（難波 2011:313）。

一方、国語教育の中では、イメージは主に文学教材の学習において着目され、子どもたちが教材の叙述にふれて自身の内面にそれを形成していくことが、読むことの基本であり核心として位置づけられてきた。例えば有定稔雄（1976）、深川明子（1987）の論考においては、文学教材の読みにおいて形成されるイメージについて、(a) 視聴覚や感情など概念以上の内容を含むこと、(b) 叙述に即したイメージ形成の積み重ねによって読みは正確で深いものになること、(c) イメージ体験は自己を見つめ直す契機を提供し、自己変容へと導く機能をもつことなどが共通の観点として提出されている。ここには心意伝承の視点は示されていないが、そもそもこうした過程が生じるのは、文学教材を構築している一つ一つの国語がイメージの伝承体であると同時に、一人一人の子どもが教材との出会い以前に、現実生活において様々なイメージを伝承しているためである。ところが、これまでの国語教育では、文学の叙述に基づいて形成されたイメージにばかり焦点が当てられ、それ以前に、子どもたちが現実生活の中でどのようなイメージを保ち伝えているのか、どのような事物事象に臨んで (c) のような深い自己変容のイメージ体験を起こしているのか、かつそうしたイメージやその体験は通時的かつ共時的にどれほどの通性を持つものなのかについて調査を行い、それを手がかりに「伝承的イメージへとつながる産道を思い出させるしかけ」（難波 2011）を創造する、あるいはそのしかけを予め内蔵している効果的な教材を選択するという流れの確立が、十分にはなされてこなかった。もちろん、心意伝承やイメージの語は用いられていないものの、小川雅子（1996）や村上呂里ら（2014）等、特に古典や「伝統的な言語文

化」の学習に関する実践や研究には、同様の視点によるものが多くある。しかし、子どもたちの自信のなさや人間関係に対する不安の強さがこれほどに問題視され、その原因に同世代内また世代間の対人経験の不足、地縁的な人間関係の希薄化が指摘される今日においては、そうした視点をあらためて国語教育全体の根本に据え直す必要があるのではないか。つまり、イメージの伝承性を探り、それを手がかりに「伝承的イメージへとつながる産道を思い出させるしかけ」（難波 2011）を創造して、子どもたちの根なし草の心を通時的・共時的なつながりへと導き、長大な伸びを持つ連帯感と自己同一感をもたらしていくことが、国語教育の喫緊の課題ではないかと考える。

以上のことから、本研究では、子どものイメージにおける伝承性の一つの実相を考察する。方法と手順は、以下の通りである。

(1)「夕日」を題とした子どもたちの作文を考察し、そのイメージの類型性を整理する。

(2)(1) の作文と、夕日をめぐる古来の伝承的イメージとを比較し、その通性を考察する。

2　子どもの作文に見るイメージの類型性

2-1 「夕日」作文調査の概要

ここでは、「夕日」を題として書かれた子どもたちの作文を事例にとり上げながら、そこにどのようなイメージの類型性が見られるかを考察する。対象とする作文は、上原が主宰していた「児童の言語生態研究会（以下、児言態）」[4]の会員が、子どもの感情生活における浄化作用についての調査をするために、昭和 61 年 5 月から翌年 5 月までおよそ一年をかけて、それぞれの勤務する小学校で集めたものである。事例数は、2 年生から 6 年生の各学年ごとに約 100 例ずつ、計 667 例に上る。その考察の成果は、会員の小林照子によって、『児童の言語生態研究』13 号に報告されている（小林 1988）。今回は、小林ほか児言態会員の方々に許可をいただき、論文内に掲載された約 100 例の作文について、イメージの類型を改めて整理する。

小林（1988）の報告によると、「夕日」という言葉を契機としてどのような「イメージ運動」[5]が発現するかを観察するために、各調査者は作文を書かせる際に、その内容について触れないようにし、「『夕日』という題で作文を書いてもらいます。『夕日』と聞いて、今心の中に広がった思いをそのまま書いてください。」とだけ指示したという（小林 1988:49）。そうして書き付けられた作文について、小林は「邂逅性」「予見性」「没我性」「祈祷性」[6]といった「イメージ運動」の類性によって整理し、学年ごとの傾向とともにまとめている。またその上で、「夕日」という事象あるいはそれを指す国語によって子どもたちの内に呼び覚まされるイメージは、多様であると同時に類型を持つこと、即ち、温かく包み込んで疲れを癒し、また怒りや悲しみを鎮めて明日への活力を与えてくれる「夕日」イメージが、子どもたちの内に共通して息づいていることを見出している。

2-2 「夕日」イメージの類型性〔資料1参照〕

3 子どもの作文に見るイメージの伝承性

3-1 「夕日」に関する民俗学的資料〔資料2参照〕

ここでは、子どもたちの「夕日」作文に見られたイメージの類型性と、夕日に関する民俗学的資料との比較を行い、「夕日」をめぐるイメージの伝承性について検討したい。

手がかりとしてとり上げるのは、民俗学者・折口信夫の小説『死者の書』（折口 1943）〔資料2-❶〕と、その「あとがき」として位置づけられる「山越の阿弥陀像の画因」（折口 1944）〔資料2-❷〕である。[8]『死者の書』は奈良時代の日本、大和（奈良県）と河内（大阪府）の境にある二上山とその麓の当麻寺（奈良県葛城市）を舞台とする物語であり、藤原南家の姫君・郎女が17歳のときに発心して当麻寺に入り、「称讃浄土仏摂受経」一千巻を写経した後、阿弥陀如来を描いた蓮糸の曼荼羅を一夜にして織り上げ、28歳のときに阿弥陀如来の迎えによって浄土に入ったという古い伝説[9]を素材としている。

物語の主人公・藤原南家の郎女は、父から贈られた称讃浄土仏摂受経の手写を一心につづけていたある春分の日、蔀戸から望む二上山にしずむ夕日のうちに「荘厳な人の俤」をありありと見る〔資料2-❷〕。その御姿に恍惚となった郎女は、その邂逅を写経の功徳と信じ、一層の思いで手写に専念するようになる。そして半年後の秋分の日、郎女はふたたび夕日のうちにその俤人に逢うことが叶う。しかしさらに半年後の春分の日、郎女がついに千部手写を果たして筆を置くと、にわかに雨がふり始め、待ち焦がれた俤人は二上山に顕れぬまま、無情にも夜が降りてきてしまう。茫然自失となった郎女は、俤人を求めるあまり誘かれるようにして屋敷を出ていき、まっ暗な嵐の中を二上山を目指してひたすらに歩いていく。『死者の書』の物語は、郎女の夕日に向うこうした情動的なイメージによって始まり、貫かれている。物語の末に郎女は、夕日のうちに幻視した俤人への思いを、阿弥陀如来を描いた蓮糸曼荼羅として結実させていく。

「山越の阿弥陀像の画因」〔資料2-❶〕の中で、折口はこの『死者の書』を、「山越の阿弥陀像〔資料2-❸〕」の真の要因を表現した小説として位置づけている。「山越の阿弥陀」とは、平安時代末期から江戸時代にかけて描かれた日本独自の仏画の様式であり、山の端の向こうに示現した巨大な阿弥陀仏を表わしたものである。その様はまさに郎女が二上山に沈む夕日に見た俤人の姿を彷彿とさせるものであるが、大陸の仏画には見られないこの様式が日本の地に成立した背景に、折口は「日想観〔資料2-❹〕」があると見ていた。「日想観」とは、浄土教の根本仏典の一つである「観無量寿経」に、西方浄土を観想する第一の方法として説かれているものであり、春秋の彼岸の中日に西方に沈む夕日の輝きのうちに阿弥陀仏あるいは浄土の情景を感受し、日没の後もそのイメージを心の中にありありと現前させるという行法である。折口は、「山越の阿弥陀」の御姿は、「日想観」において人々が感受している夕日の形象に他ならないと考えたのである。さらに折口は、「日想観」自体の成立についても論を進めており、その儀礼が、仏教の渡来する以前から日本の各地で春分の頃に行われていた「日の伴〔資料2-❺〕」、すなわち、日の出

〔資料１：「夕日」作文の類型性〕[7]

(1) 夕日が出る

①夕日はなんで出てきたりひっこんだりするんだ。［２年男子］　／②赤いきれいなまっかっかな夕焼け。トマトが海から上がってくるみたい。［３年男子］
③夕日はしずんでもつぎの日の夕がたにはまたでてきます。［４年男子］

(2) 夕日がすき

①ぼくは夕日がすきです。ぼくが三才にはじめて夕日をみてびっくりしました。それは大きいからです。そのときから夕日がすきになりました。いつも夕日をまどから見ています。ぼくは夕日が大大大大の大すきです。［２年男子］
②ぼくはいつも夕日が来るのを待っている。いつもいつも待っている。［３年男子］

(3) 夕日に夢中／みとれる

①ちっちゃいころのゆめは夕日をつかまえて、夕日をさわりたいとおもっていた。でも夕日はざんねんながらさわれない。６才になって夕日をおぼえてじぶんがバカとおもった。なぜかというと虫のあみで夕日をおいかけたとか。もう６才になったら、夕日は見るだけとわかったから、もうやりません。夕日づかみは４才までやっていた。（中略：引用者）７才になってはじめて夕日がきれいなことがわかりました。［２年女子］
②みとれてしまって、なにもかもわすれてしまいそうな夕日が大すきです。夕日ってなにかふしぎなみ力とやさしさがあるからです。［３年女子］
③夕日を見ていると目が休まるような感じがする。そして時間がたつのもすっかりわすれてしまいます。［３年女子］
④夕日はとてもきれいで、見ているとうっとりとして気をとられてしまいます。［５年男子］
⑤お母さんも夕日にうっとりしている。タご飯作りのと中で、夕日は手を止めるすごい力をもっている。［５年女子］

(4) 夕日に入る／なる／かけこむ／すいこまれる

①きょう、夕日を見ました。夕日にのって、夕日にあなをあけました。そのあなに入るとはだかになってもあつくてしょうがないんです。あなから出たらＹくんとＭさんがキッスをしてけっこんしていました。（中略：引用者）Ｙくんと Ｍさんは赤と青の線でむすばれていました。［２年男子］
②夕日が好きです。夕日の中へかけこんでいきたいです。［３年男子］　／③一回でいいから夕やけにのってみたいです。［３年男子］
④夕日を見たときむねがすっとする。まるで自分が夕日になった気持ちになる。［３年女子］　／⑤わたしも夕日になりたいなぁ。［３年女子］
⑥私は夕日をみると、自分までまっかなほのおの中にいるようなかんじがします。夕日は私のようふくの色をオレンジ色にそめてしまい、かお、かみの毛までオレンジ色にそめてしまいます。そのときは、「やった。夕日の中に入れた。」とかんじてしまいます。（中略：引用者）いつか夕日に入りたいなぁ。［４年女子］
⑦夕日を見ていると、自分まで夕日になってしまう気がする。ほら！足の方からオレンジになってきた。わっ！もうからだがうすーいオレンジだっ！足は下の方からだんだんこくなってきている。ういてきた！いっしょに夕日になっちゃうよ！そんな気がしてくる。あっ！［４年女子］
⑧夕日は、ゆめのかなたのように本当にきれいな色で光るので、その中へ走っていきたいような気持ちになります。［５年女子］
⑨あの夕日につっこんでみたい。［５年男子］　／⑩夕日を見ると心がすいとられそうです一っとする。［５年女子］
⑪夕日を見ていると体がゆらゆらしてきてすいこまれそうになります。［５年女子］

(5) 夕日は異世界

①夕日を見ていると、からだがぽっとあつくなってしまいます。それでじぶんがこの世界にいないのだとおもってしまいます。［３年女子］
②夕日を見るとぼくはゆめをみている気分になります。それは、あのまっ赤な空、そしてうす暗いあの感じを思い出します。地面もみんなの家もまっ赤。夕日をみているとあたたかい感じがして、ねむくなりそうになる。ほかの世界にふんわりふんわり飛んでいきそう。［５年男子］
③夕日を見るとぼくはポカーンとつったったまま、「きれいだなぁ、青春というのはすばらしいものだ。」とバカげたことをいいます。あと、自分が自由になった気持ちになってしまいます。空を飛びたくなったり、もうちがう国のハワイにいる感じがして楽しくなったりします。夕日を見るときはいつもそう思います。夕日が上がると、なにかかならず楽しいことやいろいろ思いだすので、夕日というのは人をなにかの空間にさそいこむと思いました。［５年男子］
④夕日を見ると私は不思議な世界に入っているような気がする。まっ赤な色。ふしぎな色。美しい色。こんな色が私をふしぎな世界に入れてくれる。［５年女子］

(6) 力が湧く

①私は夕日を見ると、もう一日が終わって行くような気がします。あすの一日もがんばろうという気もしました。［２年女子］
②夕日を見ると、よし勉強がんばるぞ、というふうになるのです。［３年女子］
③夕日はあたたかい言葉だと思います。人生が明るくなる気がする。［４年女子］
④くじけたり、元気がないと、赤くて大きい夕日を見ると、元気が出てきて、明日もがんばろうという気持ちになります。［６年男子］

(7) 心が鎮め／慰め／浄められる

①ゆう日を見ると、ぼくは心がいいきもちになる。［２年男子］　／②夕日を見ていると、つかれがとれてしまうほど、きれいです。［３年男子］
③夕日を見ていると心がしずかになり、ぼーっとしてしまう。なぜかというと気持ちがいいからです。見ていればしず一かなきもちになってきます。［３年女子］
④わたしたちは、つらいときは夕日見て、きげんをなおすことです。けんか、くるしみもあります。それを夕日とかんけいにすれば、きっとそうゆうものをなくしますね。でも、きげんがなおせないのなら、あくしゅも、なにもできないのなら、あやまって、夕日をみましょうね。夕日はきれいにきえていくんだ。［３年女子］
⑤いらいらしていたり、おもしろいことがないときは、よく夕日を見る。そうすると気持ちがなんとなくおちついて、いかりがきえ去る。［４年男子］
⑥悪いことがあると、そんなことはふっとんでしまうかんじ。夕日を見ていると心がきれいになってきます。なぜかそんなかんじがしてしょうがない。［４年女子］
⑦夕日にはゆめがある。明日がある。夕日を見ているといやな事はわすれる。うれしい事を作ってくれる夕日は、人をなぐさめるために出てくるのかもしれない。［５年女子］
⑧きれいだなぁと思う夕日。夕日を見ていると気がやさしくなったような気がする。他の人も悪い心がぬけていき、善い心がもてると思う。［６年男子］
⑨夕日は、人間のきもちをなごやかにしてくれたり、そんなことでくじけるなとゆうことを、自然がぼくたちに、きれい、美しいというかんじょうをもたしてくれているのではないかっとぼくは思う。［６年男子］

(8) 眠れる

①よくねむれない時は、夕やけを思い出します。そうするとよくねむれます。［３年男子］
②夕日はなんかわたしをねむらせようとする。（思うのはわたしだけかもしれないけど）わたしは夕日が大すきです。なぜかというと、もしもつかれていたら夕日でねむることができるからです。［４年女子］
③夕日を見ると、なにかとってもやさしいおかあさんのように、ぼくを見守っているように感じた。そして何かとっても明るくあったかいようなものをかんじて、何かほほえんでしまった。そしてつかれたし、夕日があっておかあさんのようにあったかいので 30 分ぐらいねてしまった。［５年男子］

(9) 思い出す

①わたしはゆうひをみると、小さいときのことを思いだします。そして、うちにかえってしゃしんをみながら、小さいときのことを思い出します。じてん車にのってころんでないたとか、てつぼうからおっこって、そういうことをおもいだします。[2年女子]

②夕日を見ると、田舎のおばあさんやおじいさん、いとこたちのことを思い出す。そして、そばにおじいさんとおばあさんが立っているようだ。夕やけはぼくのおじいさんみたいだ。[3年男子]

③夕日を見ると私は死んでしまったインコの顔を思い出します。[5年女子]

④夕日は今日一日、いや、もっと前のことも思い出す。夕日を見ているといろんなことを思い出し、心もほっとする。[5年女子]

⑤夕日を見上げていくと、思い出がいっぱい広がってくるのです。その日一日の出来事も……。これからは夕日の時を大切にしていくと共に夕日を見ながら心をきれいにしていきたいと思います。[5年女子]

⑥夕日を見ていると、つかれがとれて心がやわらぎます。一日のことが思い出されて、とてもおだやかな気持ちになります。[6年女子]

(10) 悲しくなる

①わたしは「夕日」というだけで悲しくなります。なぜかというと、夕日がしずんでしまうからです。夕日がしずんだらかわいそうなきがするからです。わたしはどうしても悲しくなってきます。かわいそうな気がしてくると、ちっちゃいときのことを思い出します。でもいいことがあるかもしれない。[4年女子]

②夕日を見ると、わたしは悲しくなる。ふと前の小学校を思いだしてしまう。[5年生女子]

(11) 涙

①わたしは、夕やけの中でみんなとあるけたらいいだろうな。一度だけでもともだちぜんいんで手をつないでいっしょに歌をうたいたいな。そうしたらとってもうれしくて、からすといっしょにうたをうたってみたいな。そしていっしょにかえりたいです。とてもうれしくて、目の中からなみだがでそうなかんじになってくるかもしれない。[3年女子]

②富士山の所に夕日がかさなっている。絵にでも書いてみたいな。その絵にはいっぱいなみだがたまっているようだ。[5年女子]

(12) 夕日は友だち

①ぼくは夕やけが好きだ。夕やけもぼくのことをすきだといいなぁ。[3年男子]　／②夕日はきれいだ。赤い夕日があく手をしにきそうだ。[3年男子]

③私ははじめて見た時の夕日は友だちみたいに思いました。[3年女子]　／④私は夕日と友だちになりたいといつも心の中で思う。[3年女子]

⑤夕日は、私の友だと思う。友というのはなんだろう？　どこにでもいるやさしい心。帰ってみたい日もあったりする。私は自信をつけようかとも、夕日をみると思う。私は友に何もできない。それを私が答えをやさしい心をさがすのです。私はけっして一人ぼっちじゃないと、夕日をみて思うのです。[5年女子]

⑥夕日は人のように心をもっています。(中略：引用者)夕日はぼくらの友達だ。ずっとずっと昔から長い長い年月を経て……。[6年男子]

(13) 夕日と語らう／語らいたい

①夕やけは、いつも私を見ている。私が見ていると、ついてきて、(中略：引用者)まっ赤な声をかけているような感じです。私も声をかけます。[3年女子]

②夕日がしゃべれるといいと思う。しゃべれたらいつも質問したいと思う。神様お願いします。夕日がしゃべれるようにしてください。わたしはいつまでもいつまでも待ちます。大人になっても待ちます。けっして死んでも待ちます。(中略：引用者)夕焼けさんも祈っててください。[3年女子]

③夕日に、目や口があったらいいのにな一。そうすれば私と夕日でしゃべられるのに一。でも心の中でしゃべればいいのかな。声を出さないで。でも、そんなのつまんない。だからやっぱり夕日に目と口があった方がいいな。[4年女子]

④夕日はわたしのそうだん相手になりそう。夕日はちゃんとやくそくをまもっているからだ。だからわたしは夕日と話したい。[5年女子]

⑤何か悲しい事がある時は、心の中で夕日と話をするようなかんじで夕日を見る事もあります。[6年女子]

⑥夕日は、僕になにかささやいているようだ。笑いながら。僕は夕日のささやく言葉を心を落ち着け、一言一言かみしめて聞く。そうすると夕日は僕に一日の事を訪ねているようだ。[6年男子]

(14) 夕日は神さま

①夕日は、人を美しい心にさせたり、人をヤル気をおこさせたりする神様の化身なんじゃないかなぁと思います。[5年女子]

②まるで神様のようにやさしくひかっている夕日を毎日かかさずみたいと思います。[5年女子]

③夕日というのは、一日の終りを告げるものです。しかし、ちがう、全くちがう方向からとらえると、一日の神になります。ちょっと空想話みたいだけれど、海を見ると夕日は海の神のように、一日の終りと共に海に消えます。山を見ると、夕日は山の神になり山へ消えます。そして空にいる時、地上を全てみおろしている神です。そして僕たちは、夕日にいつも一日をうったえ、また見せています。そのように考えると夕日は大きい存在といえると思います。[6年男子]

(15) 夕日に祈る

①わたしは、夕日にもねがいがかなうのかなあ一とわたしは思いました。もしねがいがかなうとしたら、夕日さんにとびばこのとびかたがうまくなるようにと、わたしは夕日におねがいを言いたいと思います。[3年女子]

②まっ赤な夕日。これで明日はきっといいことがあるぞ。夕日よ夕日、おしえておくれ。明日は何があるんだい。きっといいことにちがいない。夕日。明日に早くしておくれ。どうか明日も幸せになってほしい。いつまでも幸せでありますように。[5年男子]

(16) 夕日は自分の鏡

①夕日は思い出させてくれるまほうのかがみだ。[3年男子]

②夕日は何色か。それがわたしにはわからない。赤い色？　そうじゃない。たぶんいろいろ人によって変わるのだ。わたしだって夕日を見るとうれしい時はいろいろたのしい色に見える。かなしい時には、夕日の光りが、くもりのくらい色になり、雨というかなしいそしてくらい色になる。[4年女子]

③私の夕日というのはかんじょうでとてもかわるものだと思います。楽しいときはとっても美しいものに見え、さびしい時はさびしく思えてきたりします。だから私は夕日はとても不思議なものと思えます。[5年女子]

④夕日を見ると自分の一生と、過去が見えて来るように感じます。(中略：引用者)自分の鏡だと思います。表現も見方によってはいろいろあります。夕日は自分の思っている事を出す機械だと思います。[6年男子]

⑤夕日は太陽がしずむときに光るのだから悲しくなるのかもしれない。赤く輝いて、ほんとうに悲しそうに光る。でも、みんなが悲しく思うかもしれないけれど僕にとってはなぐさめてくれるような人のように感じる。とってもやさしい人だ。でも悲しい人には悲しく感じるであろう。ぼくは夕日はとってもふしぎなものだと思う。うれしい時にもかなしい時にもどんな時にでも僕にとっては合うのだ。それだけ落ちついているものだと感じている。[6年男子]

〔資料２：「夕日」をめぐるイメージの伝承〕

❶折口信夫「山越の阿弥陀像の画因」（1949[昭和 19]年）

○山越しの弥陀像や、彼岸中日の日想観の風習が、日本固有のものとして、深く仏者の懐に採り入れられて来たことが、ちっとでも訣って貰えれば、と考えていた。(折口 1968:183-184)

○私の女主人公南家藤原郎女の、幾度か見た二上山上の幻影は、古人相共に見、又僧都一人の、之を具象せしめた古代の幻想であった。そうして又、仏教以前から、我々祖先の間に持ち伝えられた日の光の凝り成して、更にはなばなと輝き出た姿であったのだ、とも謂はれるのである。(同:198)

秋分の日の二上山の落日(芳賀[2009])

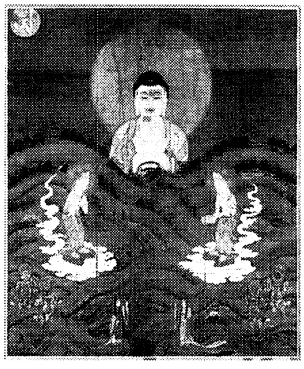
❷折口信夫『死者の書』（1943[昭和 13]年）

去年の春分の日の事であった。入り日の光りをまともに受けて、姫は正座して、西に向って居た。日は、此屋敷からは、瑣坤によった遠い山の端に沈むのである。西空の棚雲の紫に輝く上で、落日は俄かに眩き出した。その速さ。雲は炎になった。日は黄金の丸になって、その音も聞えるか、と思うほど鋭く廻った。雲の底から立ち昇る青い光りの風――、姫は、じっと見つめて居た。やがて、あらゆる光りは薄れて、雲は晴れた。

夕闇の上に、目を疑うほど、鮮やかに見えた山の姿。二上山である。その二つの峰の間に、ありありと荘厳な人の佛が、瞬間顕れて消えた。後は、真暗な闇の空である。山の端も、雲も何もない方に、目を凝して、何時までも端坐して居た。(折口 1967:169)

❸山越の阿弥陀像（鎌倉時代～江戸時代）

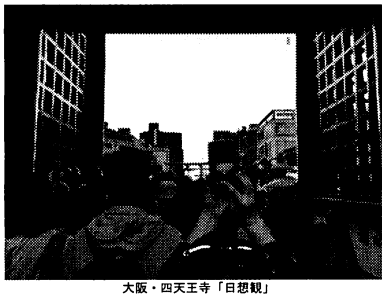
恵信僧都「山越の阿弥陀像」
金戒光明寺蔵（鎌倉時代）



静遍僧都「山越の阿弥陀像」
禅林寺蔵（鎌倉時代）

冷泉為恭「山越の阿弥陀像」
大倉集古館蔵（江戸時代）

❹日想観（奈良時代～現代）



大阪・四天王寺「日想観」
(2015 年 3 月 23 日／撮影：筆者)

四天王寺西門は、昔から謂われている、極楽東門に向っているところで、彼岸の夕、西の方海遠く入る日を拝む人の群集したこと、凡七百年ほどの歴史を経て、今も尚若干の人々は、淡路の島は愚か、海の波すら見えぬ、煙ふる西の宮に向って、くるめき入る日を見送りに出る。(中略：引用者)しかも尚、四天王寺には、古くは、日想観往生と謂われる風習があって、多くの篤信者の魂が、西方の波にあくがれて海深く沈んで行ったのであった。熊野では、これと同じ事を、普陀落渡海と言うた。観音の浄土に往生する意味であって、森々たる海波を漕ぎきって到り着く、と信じていたのがあわれである。(中略：引用者)そこまで信仰においつめあれたと言うよりも寧、自ら霊のよるべをつきとめて、そこに立ち到ったのだと言う外はない。そう言うことが出来るほど、彼岸の中日は、まるで何かを思いつめ、何かに誘かれたようになって、大空の日を追うて歩いた人たちがあったものである。(折口 1968:183-184)

❺日の伴（奈良以前～）

○昔と言うばかりで、何時と時をさすことは出来ぬが、何か、春と秋との真中頃に、日祀りをする風習が行われていて、日の出から日の入りまで、日を迎え、日を送り、又日かげと共に歩み、日かげと共に馴う信仰があったことだけは、確かでもあり又事実でもあった。そうして其なごりが、今も消えきらずにいる。日迎え日送りと言うのは、多く彼岸の中日、朝は東へ、夕方は西へ向いて行く。今も播州に行われている風が、その一つである。而も其間に朝昼夕と三度まで、米を供えて日を拝むとある。(柳田先生、歳時習俗語彙)又おなじ語彙に、丹波中郡で社日参りというのは、此日早天に東方に当る宮や、寺又は、地蔵尊などに参って、日の出を迎え、其から順に南を廻って西の方へ行き、日の入りを送って後、還って来る。これを日の伴と謂っている。宮津浜では、日天様の御伴と称して、以前は同様の行事があったが、其は、彼岸の中日にすることになっていた。紀伊の那智郡では唯おともと謂う……。こうある。(折口 1968:185)

○此ように、幾百年とも知れぬ昔から、日を送うて西に走せ、終に西山・西海の雲居に沈むに到って、之を礼拝して見送ったわが国の拿攫希夫人が、幾万人あったやら、想像に能はぬ、永い昔である。此風が仏者の説くところに習合せられ、新しい衣を装うに到ると、其処にわが国での日想観の様式は現れて来ねばならぬ訣である。日想観の内容が分化して、四天王寺専有の風と見なされるようになった為、日想観に最適切な西の海に入る夕日を拝むことになったのだが、依然として、太古のままの野山を馳けまわる女性にとっては、唯東に昇り、西に没する日があるばかりである。だから日想観に合理化せられる世になれば、此記憶は自ら範囲を広げて、男性たちの想像の世界にも、入りこんで来る。そした処に初めて、山越し像の画因は成立するのである。(折口 1968:196)

から日の入りまで日がな一日、日を追い、日を拝む風習を素地として発生したものであることを明かにしている。つまり日本風土にはもともと夕日を尊び拝む風習があり、仏教の西方浄土の観念や「日想観」はそれを素地として受け入れられ、定着されて、「山越の阿弥陀」もまたその延長線上に成立したのだということを、折口は看破したのである。要するに折口は、『死者の書』の主人公・郎女をして、「日の伴」、「日想観」の風習、そして「山越の阿弥陀」の制作をすべて体現させていたことになる。

西方に沈む夕日の光に超越的な存在や世界を感受する／しようとするイメージの働きが、時を超えて人々の胸に伝い、発動し、儀礼や芸能や芸術作品を次々と生み出していく様が、ここに確認される。

3-2 「夕日」に関する民俗学的資料との比較〔資料１及び２参照〕

さて、ここで改めて子どもたちの「夕日」作文、そのイメージの類型に返ってみる。すると、(1) ～ (16) のうち多くのものが、〔別紙２〕に見た夕日をめぐる民俗文化との通性を示していることに気づく。(2) や (3) は言うまでもないが、夕日は沈むものという常識からは誤認と思えた (1) も、『死者の書』の二上山の俤人や「山越の阿弥陀」の示現、また「一度落ちかけた日が、ぬっと伸しあがって来る感じ」を併せて思い起こせば、むしろ子どもの方が実感に相応しい言葉を選んでいるとさえ言える。また (4) や (5)、そして (12) ～ (15) は、『死者の書』の郎女を衝き動かしていたイメージに重なるものと言えるし、「山越の阿弥陀」を描いた僧都らや「日想観」に群集する人々の内に観想されていた／いるイメージ、そして仏教渡来以前の古代の人々を「日の伴」に駆り立てていたイメージそのものと考えることができる。

さらに (6) ～ (9) また (16) 等の示す、夕日のもたらす生命の浄化作用あるいは活性化作用については、〔別紙２〕でとり上げた事例の中に直接の記述があるわけではないが、むしろそうした民俗や文化が時代を超えて人々を惹きつけてきた内因を、子どもたちの言葉が的確に表現していると言えるのではないだろうか。

以上の考察では、子どもたちが現実生活の中で、夕日に際して感受しているイメージ、発動させているイメージが、一個人や一時代に限定される特殊なものではなく、伝承性を持つもの、すなわち個人や時代を超えて共有されてきた広くまた古い来歴を持つものであることが明らかになった。しかもそのイメージの発動は、夕日に「惹きつけられる」ことを無意味にくり返させるのではなく、生命の浄化や活性化の作用を伴う点が重要である。『死者の書』の郎女や「山越しの阿弥陀」を描き拝んだ人々、「日想観」や「日の伴」に群集した人々がかつて恐らくそうして生きていたように、子どもたちもまた、夕日に臨んで発動するイメージによって、その命を浄められ、あるいは強められ、日々を支えられて生きていることを、一つ一つの作文から窺い知ることができる。

夕日という事象に際してなぜ人間にこうしたイメージの発動と作用が生じるのかということについては、ここではただ不思議として留め置くほかない。しかしその理由はともかくとして、私たち人間が夕日に臨んでこうしたしなやかな生命力を作動させてきたということ、長大なる時の

経過の中で図らずもそれを共有してきたという事実は、今日の子どもたちの閉塞感や孤独感を解き、他者との連帯感やそのつながりにおける自己同一感を確かなものとさせ、心強さを与えうる。

国語教育の基層研究として、こうした伝承的イメージとその作用を追究し、それを手がかりに「伝承的イメージへとつながる産道を思い出させるしかけ」(難波 2011) を創造し、あるいはそのしかけを予め内蔵している効果的な作品を選択して、教材として機能させていくことの重要性がここに見出される。

4　今後の課題

本研究の課題として、大きく以下の三点が挙げられる。

(1) イメージの伝承性について、人類学や宗教学また文学や心理学における先行研究の視点を整理すること。またそれらの分野においてどのような伝承的イメージやその作用が見出されているかを考察すること。

(2) (1) を手がかりにして、子どもたちの内なる伝承的イメージを調査すること。

(3) (1) (2) を踏まえた国語科の教材開発、またそれを用いた授業実践を行い、検証と改善を重ねること。

これらの点について、引き続き取り組んでいきたい。

注

1　ここで言うイメージは、心理学において通常指示される「直接知覚される対象がないのに浮かぶ心象」ばかりでなく、情感や感動を伴って心的エネルギーを意識へと運び込むはたらきをするイメージ (河合 2000) を指している。

2　元玉川大学文学部教授。小学校教員の養成課程に携わる傍ら、心意伝承の視点から民俗学・国文学・国語教育学を有機的につなぐ研究を行い、それに基づく国語教育実践を展開した。1996 年没。

3　折口 (1971) は、「心意伝承」の命名者は柳田であるとしているが、柳田は自著においてその語を用いておらず、「心意現象」(ときに「無意識伝承」) の語を用いている。折口は「心理伝承」の語を用いることもあったが、多くは「心意伝承」の語を用いている。本発表では、折口最晩年の門弟であった上原の用語に従って、一貫して「心意伝承」の語を用いる。

4　上原輝男が 1968 年に設立し、亡くなるまでのあいだ主宰を務めた幼稚園・小学校の現場教員による国語教育研究会。『児童の言語生態研究』は 17 号まで刊行。現在も上原門下を中心にして月例会や公開研究授業等の活動を続けている。

5　精神人類学の藤岡喜愛のイメージ論における用語。人間のイメージは意識のコントロールを超えた自律的な運動様式をもつとされる (藤岡 1974)。児言態は、特にイメージの運動性に着目する場合に、この用語を用いる。

6　上原 (1985) の「子どものイメージの情動における四つの仮説と一つの付記」に示された、「イメージ運動」の類性を表す用語。

7　小林 (1988) 掲載の事例を、筆者が抜粋・再整理した。

8　『死者の書』は初め、昭和 13 (1938) 年暮れから翌年 1 月にかけて雑誌に連載された。折口は後にそ

れを大幅に改稿し、昭和 18（1943）年 9 月に単行本として刊行している。今日知られる『死者の書』は、この改稿後のものである。

9　鎌倉時代に成立した「当麻曼荼羅絵巻」所収。

主要引用参考文献

有定稔雄（1976）『イメージ化の読み』明治図書

上原輝男（1985）「子どものイメージの情動における仮説とその実証」（岩田慶治編『子ども文化の原像―文化人類学的視点から』日本放送出版協会）

上原輝男（1987）『心意伝承の研究　芸能篇』桜楓社

上原輝男（2011）『続感情教育論―心の琴の音の鳴る子に』児童の言語生態研究会

宇佐美斉（1989）『落日論』筑摩書房

エリアーデ．M 著（1952）／前田耕作訳（1971）『イメージとシンボル』せりか書房

小川雅子（1996）『内在価値を感じさせる国語教育の根幹』渓水社

折口信夫（1967）『折口信夫全集第二十四巻』中央公論社

折口信夫（1968）『折口信夫全集第二十七巻』中央公論社

折口信夫（1971）『折口信夫全集ノート編第七巻』中央公論社

河合隼雄（2000）『講座心理療法〈3〉心理療法とイメージ』岩波書店

小林照子（1988）「子どもの感情生活における浄化作用について―「夕日」作文にみる子どものイメージ運動」（『児童の言語生態研究』13）

田嶌誠一（2011）『心の営みとしての病むこと―イメージの心理臨床』岩波書店

徳冨盧花（1958）『自然と人生』角川書店

中村元ほか（1990）『浄土三部経（下）』岩波書店

難波博孝（2011）「解説」（上原輝男『続感情教育論―心の琴の音の鳴る子に』児童の言語生態研究会）

芳賀日出男（2009）『折口信夫と古代を旅ゆく』慶應義塾大学出版会

秦恭子（2015）「心意伝承論の国語教育への展開とその可能性」（『初等教育カリキュラム研究』3、広島大学大学院教育学研究科初カリキュラム開発講座）

秦恭子（2010）「こどもの『死者の書』―渡りくる夕日と結ばれるための一小節」（『国語教育思想研究』2、国語教育思想研究会）

蜂屋慶編（1985）『教育と超越』玉川大学出版部

林浩平（2009）『折口信夫　霊性の思索者』平凡社

深川明子（1987）『イメージを育てる読み』明治図書

藤岡喜愛（1974）『イメージと人間―精神人類学の視野』日本放送出版協会

堀口大學（1980）『現代詩文庫 1019 堀口大學』思潮社

村上呂里・荻野敦子編（2014）『沖縄から考える「伝統的な言語文化」の学び論』渓水社

やまだようこ編（2010）『この世とあの世のイメージ―描画のフォーク心理学』新曜社

ユング .C.G 著／林道義訳（1999）『元型論［増補改訂版］』紀伊国屋書店